仏教における価値と行動
――持続可能性と地球憲章をめぐって

ジョーン・アンダーソン

本稿では、さまざまな分野で環境問題に取り組んでいる世界各地のＳＧＩ（創価学会インタナショナル）メンバーの声を紹介したいと思います。これらの事例は、ＳＧＩのウェブサイトから抜粋したものです。[1]

何がＳＧＩメンバーの行動主義を形成しているのか。それを分析するために、具体的事例を参照することによって、メンバーの環境問題への取り組みを促しているものは「仏教的な価値観と信念と実践」であることを示していきます。

日蓮仏法の理念

日蓮（１２２２‐82年）は、中世日本仏教の歴史において、物議を醸した人物といえます。彼は、仏教の真意を曲解していると思う人々に対して、果敢に異議申し立てをしていきました。日蓮の通例のイメージは必ずしも熱心な環境保護論者のようなものではありません。

しかし、私自身も含めたＳＧＩメンバーは、日蓮の

著作や人生について繰り返し学び、人を惹きつけるその人格や、深い情愛と情熱、知識の広さと緻密さを知っています。「すべての生命に仏性が内在する」という法華経の核心的メッセージを確信する日蓮の思想は、楽観主義的であり、人々に希望を与えました。

日蓮の著作をスペイン語に訳したカルロス・ルビオ教授（国立マドリッド・コンプルテンセ大学）は、彼について次のように述べています。

「日蓮は他の宗教指導者とは全く違った性格を持っていました。私は、日蓮の人格や振る舞いといった人間的側面に深い感銘を受けました。当時の日本社会の傾向性は順応主義です。鎌倉時代という武家社会の中で、権威、権力に追随する当時の宗教界にありながら、日蓮は真っ向から権威、権力に対立します」「自分が本当に思っていることは言わない風潮がある日本において、日蓮はこの精神性を超越し、生命の危険を感じても、真実を言い放ちます。日蓮の魂を一言でいうと『戦う精神』ではないでしょうか」[2]

SGIのメンバーにとって、この「戦う精神」こそ、日蓮から受け継ぐべき大切な精神なのです。

日蓮は、自分の生きた時代を、末法の初期であると信じていました。しかし、彼は決して運命論的あるいは悲観的なものの見方をしたわけではありません。日蓮の焦点は、あくまで現実世界に定められていました。そして、現実世界で生き抜くために、さらには栄えていくために必要な精神的要素を人々に備えさせようとしました。彼にとって、釈尊は遠く離れた存在などではなく、模範とすべき一個の人間だったのです。このことは日蓮が「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」[3]と述べている通りです。

このように現実の人間こそが彼の対象であり焦点でした。とはいえ、もちろん彼の世界観は二元論的なものではなく、人間の生命と環境は決して切り離せないと観ていました。日蓮は書いています。

「一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり」[4]

もしも、ある人が「すべての生命に具わる価値」を信じていれば、あるいは信じようとしているのであれば、それに一致するような行動をとることでしょう。少なくとも、そうしようと努めるのではないでしょうか。それに対して、自分は周囲――人であれ、それ以外であれ――との相互関係によって成り立っているのだという認識が欠如し、自他の生命を切り離して考えてしまえば、周囲への差別的態度や破壊的行動を正当化しかねません。

この件に関するSGIメンバーのものの見方を示すデータがあります。1997年にフィリップ・ハモンドやデヴィッド・マハチェクがアメリカSGIメンバーを対象に行った調査によると、「自然とは、それ自体が崇高あるいは神聖なものである」ということに賛成した人は81%でした。一方、米国の一般社会での調査では、それに賛成した人は24%でした（年齢調整あり）[5]。

仏教は「3つの関係性」を重視しています。「人間と環境の関係」「人間同士の関係」「自分自身との関係」です。SGIメンバーは、日蓮仏法の信奉者として、これらの存在すべてが最も深い次元で相互に結ばれており、分かちがたく連鎖し依存し合っていると考えています。

日蓮は、「衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と云ひ穢土と云うも土に二の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり」[6]と述べています。ですから、私たち信仰者にとって、「心を変える」ことこそが鍵となる挑戦なのです。

アフリカ・コートジボワールの女子部のメンバーで、コートジボワール環境汚染改善センターで働いている女性は語っています。「仏法は、人間生命と環境が一体であるという依正不二の思想を説き、互いが創造的に作用し合っていくプロセスを教えています。この概念は『自然環境の健全さは、一人ひとりの認識を変革することにかかっているのだ』と私に気づかせてくれました」

私たちが目指す変革とは、私たちが「大我」と呼んでいるものを胸中に開拓することです。つまり、大乗仏教の理想である菩薩の姿を見習って、たえず慈愛を

強めつつ、他者の苦しみを緩和する行動をとることです。今日の世界では、菩薩の慈愛の抱擁は、人間を包むだけに限らず、地球全体を包み込むほど拡大する必要があります。

地域の川の浄化活動に取り組んでいる韓国SGIのメンバーは、こう語っています。「私は毎晩、ボランティア活動を終え、家に帰って唱題をする時、深い達成感を感じます。それが活動を続ける原動力になっていると思います。日蓮大聖人は『人のために火をともせば・我がまへあきらかなるがごとし』(7)と言われました」「地域社会の諸問題に圧倒され、あきらめるのは簡単です。しかし、私たち一人ひとりは、変化をもたらすために、何らかの行動をすることができるのです」

SGIメンバーはこの内なる変革のことを「人間革命」と呼びます。池田SGI会長は「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」(小説『人間革命』「はじめに」)と述べています。

次に紹介するのは、アメリカSGIの女子部のメンバーの声です。彼女は、アフリカや中南米での経験を生かして、公衆衛生や環境の分野で働いています。

「何か問題が起きた時、両親は、私たちの生命と環境は密接に関係しているという依正不二の思想について話してくれました。何か大変なことがあるとき、周りの環境を責めることは簡単です。しかし、依正不二の思想は『私たち自身が心の奥底から変われば、周りの環境も変わり始める』と教えており、とても力づけられるのです」

日蓮仏法が説く、すべての生命の相互関係性、つまり「縁起」を、私たちは気候変動や森林破壊などの環境問題の中に、はっきりと見てとることができます。

SGIメンバーは、自身の仏教的世界観や価値観を直接に仕事のなかで生かそうとする傾向をもっています。香港で都市設計をしているSGIメンバーはこう語っています。「仏教哲学は、すべての生命への畏敬と尊重を基盤としており、『持続可能な開発』という概念と深く合致します。つまり、社会の調和と平等を創造し、環境を保護し、なおかつ経済を発展させていくと

いう意味です。仏教そのものが本来、個人のレベル、そしてコミュニティーと世界のレベルで、これらの諸要素にバランスを取らせていくものだと思います」

SGIの理念

SGIにおける日蓮仏法の理解と実践は、初代会長・牧口常三郎（1871-1944年）の人格と歴史、その世界観に淵源をもっています。彼の模範ならびに日蓮の著作と法華経に対する彼の解釈がSGIメンバーの倫理的骨格を支えているのです。

牧口は創価教育学会の創立者であり、創価学会とSGIにとって先覚者でした。また、彼は教育者であり地理学の専門家でもありました。彼の著書「人生地理学」には、身近な環境が人々の生活に与える影響について、くわしく書かれています。

「地と人との関係や、言ふ迄もなく非常なる大問題に属せり……然りと雖も……これ決して吾人日常の生活に疎遠の問題にあらざるのみか、吾人が実際に孜々営々解釈に熱中しつゝあるものなるを観るべし、否な啻に熱中しつゝあるのみならず、現に吾人は不知不識、不充分ながらも相応に之が解釈をなして各自を此理法に適応せしめ、以て此世に生活しつゝあるを観るへし」[8]

アンドリュー・ゲバートとモンテ・ジョフェの論文「教育の目的としての価値創造――牧口常三郎と創価教育」には次のようにあります。「牧口は、単に物理的な地理を研究したのではなく、人間の生活の心理的側面と地理とのダイナミックな関係性を探究したのである。彼は、生活と自然環境・社会環境とのつながりへの認識を基礎とした教育を行った。これによって、生徒たちの道徳心の発達を促すことを期待していたのである」[9]

牧口が日蓮仏法に出あったのは、比較的遅い年代でした。しかし、日蓮仏法の価値観と哲学が、「人々を苦しみから救い出し、大きな価値を創造したい」という彼の思想と完璧に一致していたのです。彼は、〝日蓮の教えの精神性は、理性的・科学的・普遍的な法則と調和しつつ、社会生活の現実と一体であり、現実に真正面から関わっていくものである〟との確信を得ました。

彼は「人を救ひ世を救ふことを除いて宗教の社会的存立の意義があらうか」[10]と書き残しています。

日蓮仏法の哲学と実践は、生命に至上の価値があること、そして、誰もが自己を改良し、無限に成長できる可能性をもっていることを強調しています。このことは、戦後の日本で、うちひしがれた人々に、なぜ日蓮仏法が強く訴える力をもったか、そして創価学会が1945年以降、第二代会長戸田城聖（1900-58年）の指揮のもと、どうして急激な成長を遂げたのかを説明してくれます。戸田は自身の使命をこう表現していました。「この世から悲惨の二字をなくしたい」と。

草創期の日本の学会組織では、「貧乏人と病人」を、より安定した生活を送れるようにしていくことに焦点が定められていました。創価学会・SGIが世俗的な繁栄に焦点を当てることについて、物質主義への奨励ではないのかという批判がときに見られます。しかし、日蓮仏法では、物質面と精神面は、究極的には切り離せないと教えています。人間が基本的ニーズを満たせる生活水準を求めることは、苦しみを緩和するという意味でも――これは仏教の慈悲の価値と一致します――、また誰もが自身の尊厳を具体的に感じられるようにするためにも――生命に内在する尊厳性への畏敬です――、理にかなった正当な行為なのです。世界中の多くのSGIメンバーは、貧困や社会的排除などによる多くの難題に直面しています。私たちは、こうした問題に対して個人のレベルでも社会的レベルでも取り組まなければならないと信じます。

しかし、もちろん、野放図な欲望や貪欲さがあっては、持続可能な開発は実現できません。貪欲さについては、仏法では人間の苦しみの基本的原因である「三毒」のひとつとされています。日蓮仏法では、自身の欲望の奴隷になることなく、周囲のコミュニティーの幸福や、より広い社会の繁栄に向けられた開かれた欲望へと変えていくべきであると教えています。この観点から見ると、欲望は〝よりよき価値の創造〟に必要不可欠であるといえるでしょう。

ここに、私たちの信仰実践で積むべき「陰徳」があります。そして、これこそ最も価値があり、かつ不朽

のものなのです。日蓮はこれを「心の財」と呼びました。日蓮の手紙には、こうあります。「蔵の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり、此の御文を御覧あらんよりは心の財をつませ給うべし」[11]

個人としても組織としても、私たちは、社会が経済的・物質的な価値とともに、文化的・社会的・精神的な価値もバランスよく取り入れることが大切であると信じています。これが、持続可能性のために総体的な人類共通の価値を表現した「地球憲章」に私たちが協力する主な理由です。憲章は、多様な個人・宗教団体・市民社会にとって共通の立脚点を提供するものです。

「物質的な豊かさと、地球環境への配慮のバランスを取る」という課題を考えた時、「私たちは、基本的ニーズが満たされている生活の中にあって、人類の発展とは、私たちが人間的により成長することであり、必要以上に物を所有することではないことをはっきり理解すべきである」という地球憲章の前文の一節が思い出されます。

１９９０年、イギリスＳＧＩメンバーを対象に行われた調査によると、自分は「純粋な脱物質主義者である」と答えた人は75％という多数にのぼりました。イギリス社会全体の調査（年齢調整あり）では、同様に答えた人は21％でした。また「自分は純粋な、あるいは幾分か物質主義者である」と答えたのは、メンバーではわずか５％、英国全体では49％でした。[12] また、１９９７年にアメリカＳＧＩメンバーを対象に行われた調査では、自分を「純粋な脱物質主義者である」としたメンバーは、イギリスＳＧＩより少ない45％でした。米国全体では11％です。一方、「純粋な、あるいは幾分か物質主義者である」と答えた人は米国全体では69％であったのと対照的に、メンバーでは25％しかいませんでした。[13]

ＳＧＩメンバーが現代世界の持続可能性にどのように関わっているのかを調べてみると、池田ＳＧＩ会長の言葉が彼らに核心的な影響を与えていることがわかります。

１９８３年から毎年、池田会長は平和提言を発表し、今日的課題を仏教者としてどう見るかを示すとともに、

それらの課題への対処の仕方について具体的に提案しています。

環境というテーマは、１９７８年（の提言「環境問題は全人類的課題」）以来、池田会長が何度も言及してきたものです。

１９９０年に東洋哲学研究所が発行した英文小冊子「環境問題と仏教」（*The Environmental Problem and Buddhism*）の中で、池田会長は次のように語っています。「外なる地球の砂漠化は、人類生命の〝精神の砂漠化〟と一体不二である。人類対自然の問題は、自己対他者、自己対自己の領域と密接な関連の輪を形成してくる。〝内なる環境〟が汚染され、砂漠と化した人間内奥から噴出してくるエゴイズムは、文化的・社会的環境と自然環境の総合である〝外なる環境〟の支配、収奪、破壊へと突き進んでいくのである」[14]

池田会長は、一貫して教育の大切さを訴えてきました。特に人々のエンパワーメントに役立つ教育についてです。２００２年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」に合わせた環境提言（「地球革命への挑戦――持続可能な未来のための教育」）の中では、「国連持続可能な開発のための教育の10年」の設立を呼びかけ、こうコメントしています。

「問題の規模が大きすぎたり、複雑すぎる場合は、情報や知識を得たとしても、自分との関わりが見いだしにくく、現実の行動に踏み出すまでにはいたらない場合も多いといえます。そうした限界を超えるためには、私たちの日常生活はすべて環境問題に密接につながっており、地球的な規模でプラスの変化を起こす『力』と『使命』が一人ひとりにあるとの自覚を促す教育が必要となります」[15]

急進的なエコロジー的アプローチでは、〝人間は地球と他の生物に危害を加えるだけの、歓迎されざる寄生虫〟と考える場合もあります。しかしＳＧＩは〝責任感と自覚をもって価値創造に奉仕する人間は、最も頼もしい変革の主体者である〟との認識をもっています。

池田会長は、昨年（２０１２年）の「国連持続可能な開発会議」（リオ＋20）に向けての提言（「持続可能な地球社会への大道」）でも、この点を繰り返しています。

「資源は有限であっても、人間の可能性は無限であり、人間が創造することのできる価値にも限りがない。その価値の発揮を良い意味で競い合い、世界へ未来へと共に還元していくダイナミックな概念として位置付けてこそ、『持続可能性』の真価は輝くのではないでしょうか[16]」

ナミビア共和国の漁業管理の分野で働くドイツSGIの女性は、この視点に賛同し、仏教徒になったことが、どれほど彼女の仕事のやり方にダイレクトに影響を与えたかについて話しています。

「西洋思想は、人間と自然を切り離して考える傾向があります。時には、人間は自然にとって悪い存在であると見なすことさえあります。それに対して、仏教は生命と環境は深い相互関係にあると見なします」「私にとって、仏教の依正不二の概念、そして〝すべてのものは孤立して存在することはできない〟という思想は、〝人間社会が自然と調和する方向に戻ることに貢献する漁業管理〟を実現する全体論的アプローチを探求する上での哲学的基礎を与えてくれました」

持続可能な開発のための教育

SGIは、仏教の歴史的・理論的背景への理解促進を基調とした活動とともに、「展示会」などを通して、社会教育や人々の認識を高める活動を続けてきました。それらはしばしば、国連主導の活動への支援というかたちをとります。1992年、ブラジル・リオデジャネイロでの「地球サミット」の際、ブラジルSGIは「アマゾン――その環境と開発」という展示会を主催しました。この展示会にはラテンアメリカ全体で約70万の人が足を運びました。

2002年の南アフリカ・ヨハネスブルグでの「持続可能な開発に関する世界首脳会議」（ヨハネスブルグ・サミット）に先立って、SGI代表は2001年、池田SGI会長の提言をもとに、他のNGOとも協力して、日本のNGOネットワークに「持続可能な開発のための教育の10年」の制定を提案しました[17]。

2002年、SGIは同サミットのために、地球憲章委員会と協力して、「静かなる革命」という映画と「変

革の種子」展という展示会を共催しました。この時、私たちがとったアプローチは、問題を明確にしながらも、重すぎる内容にならないようにすることでした。そして「学び、考え、力づける」（Learn, Reflect, Empower）というスローガンのもと、どの展示部門でも最後には、いわゆる「普通の人」が変革への行動をとることに成功した例を紹介しました。「一人の人間が必ず変革をもたらすことができる」という私たちの信念を伝えるためです。

私たちの最新の展示「希望の種子――持続可能性のビジョンと変革へのステップ」展は、地球憲章委員会と共催したもので、24のパネルを通して、変革を開始させるために行動した８人の個人に光を当てています。なかにはワンガリ・マータイさんやヘイゼル・ヘンダーソンさんなどの著名人もいますが、他はもっと身近な事例の人たちです。

持続可能性へのＳＧＩの貢献は、幾つかの異なるレベルで行われています。ＳＧＩには国連連絡事務所があり、代表が国際的協議や議論に参加しています。例えば、持続可能な開発のための新しい目標についてです。これはおそらく「ポスト２０１５年開発アジェンダ」[18]に取り入れられるのではないかと思います。

さらに、ＳＧＩは多くの国で、植樹活動から教師の育成まで率先して活動しています。マレーシアＳＧＩでは、２０００年に行われた最初の地球憲章のイベントをきっかけに、リサイクルと清掃の活動を続けてきました。また毎年４月を環境問題への関心と個人の責任感を高めるための地域活動をする月間としています。さらに、ブラジルでも広範な活動が展開されています。

ＳＧＩの貢献活動で最も目に見えやすいものは、１９９２年にブラジル・マナウス近郊に開設された「アマゾン自然環境研究センター」です。ここでは、劣化した森林地帯の復元に取り組んでおり、住民と森林の共生を可能にする植林技術が重視されています。またセンターでは、環境教育プログラムも手がけています。さらに、先住民の共同体と協働して、彼らが持続可能なかたちで生活を改善する手助けをしています。

またブラジルＳＧＩでは、公立学校での園芸活動とリサイクル活動を、教師や両親とともに推進していますが、これは同国教育省が認定している「牧口教育プロジェクト」の一環です。すでにブラジルの諸都市の約３００の学校で行われています。

さらに、ＳＧＩの地域レベルの活動は各国で展開されており、町や村での植樹、清掃その他の活動が続けられています。

ＳＧＩと地球憲章運動

ＳＧＩは、それぞれの地域、国家、そして国際レベルで様々なパートナーと活動をしています。そのひとつである地球憲章運動とは、15年以上も連携しています。地球憲章は、持続可能な開発を促す倫理的原則の普遍的な表現であり、その価値観は私たちのものと完全に一致しているのです。

地球憲章とのパートナーシップは、私たちに、共通する考えをもった個人や団体との新しい出会いをもたらしてくれました。何より重要なことは、私たちの価値観について、仏教徒に限らず、誰にでもわかる普遍的な言葉で話し合えるようになったことです。

ＳＧＩの関係団体であるアメリカのボストン21世紀センター（現・池田国際対話センター）は、地球憲章の草案に関する諮問会議を連続して開催しました。同様の協議会をアメリカＳＧＩも開催しました。

１９９０年代後半、地球憲章の草案が対話を通して仕上げられていった一方で、アジアではあまり注目されていないことへの懸念が高まっていました。そこで、地球憲章委員会の議長の一人であるミハエル・ゴルバチョフ氏が、ＳＧＩのもつアジアでの広い草の根のネットワークを通して地球憲章への認識を高めることに取り組んでほしいと依頼してきたのです。

地球憲章のメッセージと、ＳＧＩ憲章に示されたＳＧＩの基本的な哲学・見解は、非常に共鳴し合っています。人間の責任と主体性、相互関係性と世界的な展望を、詩的に、そして深い精神性をもって表現している地球憲章には、ＳＧＩの理念ととても近いものがあるのです。

池田ＳＧＩ会長も、例年の平和提言の中で何度も地球憲章に触れています。

例えば、２００２年の提言（「人間主義――地球文明の夜明け」）には次のようにあります。

「『地球憲章』には、環境問題に限らず、公正な社会と経済、民主主義、非暴力と平和に関する項目など、今後のグローバル・ガバナンス（地球社会の運営）を考える上で欠かせない包括的な行動規範が盛り込まれており、21世紀の人類の指針となるべきものです」[19]

ＳＧＩメンバーで地球憲章のメッセージに強く鼓舞されて、深く関わるようになり、自分で何らかのプロジェクトを始めたり、そのメッセージに基づく市民グループやＮＧＯなどを始めた人もいます。

総体的に見れば、私は、ＳＧＩがしている持続可能性への最も大きな貢献は、メンバー一人ひとりが、それぞれのコミュニティーや職場でなしている貢献だと思います。それらの場所こそＳＧＩの哲学が現実になる場なのです。

ここで、何人かの成長の過程を、かいつまんで紹介したいと思います。これらの自己変革はＳＧＩで教えられた仏教的価値観と日々の信仰実践によって得られたものです。私は、ＳＧＩメンバー一人ひとりの努力は、行動を通しての人間革命の実例を、そのまま示していると信じます。人間革命は、大我の成長と拡大のための終わることなき過程であり、メンバーが信仰を通して目指している理想の姿なのです。

不法な森林伐採の防止に取り組んでいるイギリスＳＧＩのメンバーは、この「自己変革のプロセス」について次のように表現しています。「変革は自分自身から起こさなければなりません。私は、自分の人生を、単に生き長らえるためだけのものとか、起こった問題を解決するだけのものと考えるのではなく、何か目標を立てて、それに向かって挑戦し、長期の目標に常に焦点を合わせながら、失敗も長い目で見ていく――こういう生き方を学んだのです」

このことは、ジャニーン・フォウラーとマーブ・フォウラー夫妻の著作『丘の国に響く唱題――英国ウェールズとボーダーズ地方での日蓮大聖人の仏法』に次の

ように書かれています。

「日蓮仏法でいう悟りとは、欲望を無くすことではありません。大乗仏教でいう真の菩薩の精神で積極的に世界と関わっていく生き方のことなのです。自分自身の大我を体験できた人こそが、世界に平和と調和を生み出すことができるのです」[20]

SGIメンバーの事例研究

私はSGIウェブサイトの「メンバーの体験」のコーナーに載っていた事例から、持続可能性に関係する15人の体験を考察してみました。そのうちの幾つかは、すでに紹介した通りです。

今回の調査を通して、彼らの体験に共通点があることが印象深く、私は、その幾つかを以下にまとめてみました。

SGIのメンバーが、信仰を深めるにつれて、どのように環境への貢献を次第に増やすようになるのか、そのことについて、少しおわかりいただけるかと思います。

《SGIメンバーの体験事例の共通点》

・最初は方向性が明確ではない。
・「自分にも変化を起こせるのだ」という自信をもっていない。
・仏教の勉強と実践を始める。
・自分の置かれている状況に立ち向かい始める。
・環境とつながっている実感や責任感、思いやりの心を拡大していく。
・環境を守る取り組みや地域への貢献を、夢みたり希望したりし始める。
・「変化は自分から始めねばならない」ことに気がつく。
・自分の無力感を少しずつ克服していく。
・勉強し、自己鍛錬をする。
・目の前にある地域の課題に取り組み始める。
・仏教の教えと信仰に鼓舞される。
・壁にぶつかる。
・SGIメンバーや仏教の法理、池田SGI会長の指導によって励まされる。
・貢献への自身の決意を深める。

・自分の夢や目標を、より大きくしていく。
・このようにして貢献の大きさをどこまでも広げ続けていく。その際、彼らを励ますのは仏教の実践であり、学習であり、他のＳＧＩメンバーによる指導や支えである。

どの体験にも、貧しさと無力感から力強く蘇生して、社会に関与し貢献するようになる、それぞれの人生の旅路があります。意気阻喪させるような困難や挫折にも負けず、責任感をもちつづけ、希望を捨てないという彼らの決意が、ここには表れています。つまり、これらはすべて「戦う精神」の実例なのです。

ここにこそ、日蓮や創価学会の３代の会長の精神的遺産があり、ＳＧＩ創立に込められた願いもあるのではないでしょうか。

注

（1）http://www.sgi.org/about-us/members-stories.html?category=Sustainability
（2）『大白蓮華』２０１１年５月号、１０８-９頁
（3）創価学会『日蓮大聖人御書全集』（以下、『御書』と表記）１１７４頁
（4）『御書』３８３頁
（5）Phillip Hammond and David Machacek. *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion*. New York: Oxford University Press, 1999. 邦訳は『アメリカの創価学会　適応と転換をめぐる社会学的考察』（紀伊國屋書店）。
（6）『御書』３８４頁
（7）『御書』１５９８頁
（8）「人生地理学」緒論・第１章「地と人との関係の概観」、第三文明社『牧口常三郎全集』第１巻11頁。原文の傍点は略した。
（9）Andrew Gebert and Monte Joffee. Value Creation as the Aim of Education : Tsunesaburo Makiguchi and Soka Education, In *Ethical Visions of Education*. New York and London: Teachers College Press, 2007.
（10）「創価教育学体系」第３篇「価値論」第５章第５節「宗教的価値とは何か」、第三文明社『牧口常三郎全集』第５巻３５６頁.
（11）『御書』１１７３頁
（12）Bryan Wilson and Karel Dobbelaere. *A Time to Chant: The Soka Gakkai Buddhists in Britain*. New York: Oxford University Press, 1994. 邦訳は『タイム　トゥ　チャント

イギリス創価学会の社会学的考察』（紀伊國屋書店）。

（13）前掲 *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion.*

（14）『東洋学術研究』第29巻1号（１９９０年）、１２０頁

（15）聖教新聞２００２年８月26日付

（16）聖教新聞２０１２年６月５日付

（17）提案は、国内ＮＧＯらの支持を受け、さらに日本政府からの提案として地球環境サミット（２００２年９月、南アフリカ）で承認され、「実施計画」に盛り込まれた。その後、同年12月の国連本部で行われた第57回国連総会において正式に採択された。

（18）「ミレニアム開発目標」の達成期限である２０１５年以降の国際目標。

（19）聖教新聞２００２年１月29日付

（20）Jeaneane Fowler and Merv Fowler. *Chanting in the Hillsides: The Buddhism of Nichiren Daishonin in Wales and the Borders*. Eastbourne and Portland: Sussex Academic Press, 2009.

（Joan Anderson ／創価学会国際広報局
プログラムコーディネーター）